

第2章 今西錦司の種社会進化論 2. 中期

既成の概念からの決別と新たな展開

「私の進化論」

次に今西が進化論について書いたのは、『ブリタニカ国際百科事典 第27巻 参考文献』(1975年)に、「私の進化論」と題して掲載された論考であった。原典である英語版には存在しない『参考文献 Reader's Guide』という巻が、この百科事典の日本版に設けられることがなかったら、今西が、自ら重視するこの論文を執筆することはなかったかもしれない。この巻は、各分野の参考図書を網羅的に掲載した膨大な目録であるが、その巻頭に、アーノルド・トインビーやマーガレット・ミードを筆頭とする各分野を代表する13名の碩学が、それぞれの分野の研究状況を概説していて、そのひとりが今西なのであった。

『ブリタニカ国際百科事典』の日本版を出版することを目指して、アメリカのエンサイクロペディア・ブリタニカ社とTBSとの合弁で設立された出版社であるTBSブリタニカが、第27巻を独自に設けることになったのはなぜなのか。そこには、当時、同社事典編集部勤務していた西脇禮門^{れいもん}(現、大学出版部協会)の提言が関係している。西脇は、読者の便宜を図って、編集局長であった座本勲にその進言をしたのである(西脇、2014年10月31日、私信)。西脇は、それからまもなく別の部署に異動したため、実際の経過はわからないというが、座本が編集長の常田富之助を通じて、今西にその『参考文献』巻のための原稿を依頼したのはまちがいない。「『ブリタニカ国際大百科事典』編集局のTさんが、これから五〇年さきのことを考えてなにか書けという注文をだした」(今西、1975年、35ページ)と、今西自身が書いているからである。

今西は、『世界の名著 第50巻 ダーウィン』の編集責任者として、前章でとりあげた解説をその冒頭に載せているわけであるが、常田は、同社事典部に籍を置く前は、中央公論社で世界の名著シリーズの編集長を務めていた。西脇によれば、常田は、その縁で今西に原稿を依頼したのではないかという。

いずれにせよ、その結果として、今西が本腰を入れて執筆した「私の進化論」という論考が生まれ、同巻に収録されるに至ったのである。その10年後に今西は、再び常田の示唆を受けてこの論考を書き改め、「『生物の世界』への回帰」という表題の論文として、今度は『季刊人類学』第16巻に発表する（その後、『自然科学の展開』〔1987年、講談社〕に再録）。この改稿について今西は、「わずか十年で、書き直ししなければならなくなったとは、いささかお恥ずかしい次第である」が、「ここにこそ学問するものの楽しさがある」と記している（今西、1987年、83ページ）。50年後を見越した論考を10年で書き改めなければならなかったということは、恥じ入る必要があるどころか、その間に、理論が予期しない進展を遂げたということなので、まさに喜ぶべきことなのである。

突然変異概念との決別

かくして生まれた「私の進化論」の中で今西は、1970年代半ばの時点での自らの進化理論をわかりやすくまとめている。世界的な大百科事典のいわば別巻に収録された解説的な作品として、しかも50年後にも古びないはずの論考として、精魂を傾けて執筆されたものなので、これを一読すれば、当時の今西進化論の全容が掴めるようになっている。

この論考には、それまでになかった事柄がいくつか含まれている。ひとつは、突然変異概念とはっきり決別したことであろう。この点については、それまでにもいくつかの布石があった。この方向転換が最初に示唆されたのは、日本野鳥の会の会長であった中西悟堂とともに、今西が監修者となっていた、『アニマ』^[註1]という一般向けの月刊生物学雑誌に1974年に掲載された、浦本昌紀と今泉吉晴との鼎談の席のようである。棲みわけという現象から眺めた生物の世界は、さまざまな複合社会からなっているが、その場合、そこに至る道筋が問題なのであって、どのような仕組みで成立したかは、それが突然変異であろうがなかろうが関係ないと明言してもよかつたのではないか、^[註2]という浦本の問いかけに対して、今西は、次のように返答している。

[註1] ちなみに、今泉は、私の次弟が国際基督教大学の学生だった時の恩師であり、私の実家を訪れたこともある。

[註2] ここで浦本は、後に今西が重視するようになる“コース”と“プロセス”の違い（今西、1980年、158ページ）にふれ、コースの重要性を示唆している。

僕は突然変異に最後までひっかかってまして、同時多発突然変異とか、そういうことまでいうてますけど、それはいわんでもええかもわからん。いまはあんまりいう必要ないように思ってます。(今西, 浦本, 今泉, 1975年, 34-35 ページ)

その理由は、ここでは述べられていないが、これと相前後して、突然変異という概念を自らの理論から外すようになるのである。その理由は、4年後の1978年に行なわれた飯島衛との対談の中で明かされる。「多様性〔個体変異〕というのはいい考えやと思うんだけど、しかし、それをなぜ突然変異とされるのか」という飯島の質問に、今西は次のように答えている。

それは突然変異という概念があつて、それをを用いたほうが皆さんにわかりやすいやろうし、学問というのはそういうもので、前のものを踏襲できるかぎり踏襲するべきやという考えもあつた——やろうね。しかし、突然変異なんて言わなくてもええやないかということは、ほかの方からも注意を受けたことがありますし、また突然変異というと、それがあたかも進化の原因であるかのように、今でもとる人が多いので、進化における変化は、表現型も遺伝型も共時的に変わるものでなければならないということ、近ごろはむしろ強調するようしてるんやがね。(今西, 飯島, 1978年, 35 ページ)

今西は、梅棹をはじめとする弟子たちから、プライオリティ (創案先取権) を平然と無視するとして非難されて^[註3]いるが、その一方で、先人の概念や用語を尊重し、自らの理論が、既知の理論とどこまで共通しているかという問題に強い関心をもっていたのである。後の『ダーウィン論』や『主体性の進化論』は、そのような視点で書かれたものであるし、前者の中では、「定向進化的という点で、ゼンキンにその〔自らの理論の〕^[註4]原点を見いだした」(今西, 1977

[註3] 梅棹によれば、遊牧論(本書第5章330ページ参照)はもともと梅棹が唱えたもので、それに強く反対していた今西が、激論の末に折れたという経緯があるにもかかわらず、梅棹に断りなく、後にこれを自説として発表してしまったという(梅棹他, 2003年, 1314-1315ページ; 斎藤, 2013年b, 136ページ)。この場合の今西は、よくいえば天衣無縫ということなのかもしれないが、今ならそれではすまされないであろう。

年、166 ページ。傍点=引用者)と明言している。前章でとりあげた科学者としての公正中立という姿勢と並んで、この点は、今西の真骨頂とも言うべき特性であろう。いずれにせよ、このようにして今西は、突然変異という概念を放棄することを、この「私の進化論」の中で宣言するのである。

要するに、偶然によって進化が進み、人間が誕生するに至ったことを主張するダーウィンの自然選択説は、科学的根拠をもたない「空理空論」(今西、1980年、123 ページ)であり、「一つの神話」であると言える(今西、1986年、90 ページ)。このような筋立てでは、外部の人間が常識的に考える限り、納得するのは難しい。統計学的な観点からも、同じような批判が出されている^[註5]。そのため、こうした致命的欠陥が白日の下に晒されると、多数の信者が(そのような自覚はないとしても)無理を押し支え続けられない限り、逆に言えば離反する信者が増えると、簡単に瓦解してしまう。自然選択説は、以上のような事情から、崩壊寸前の危機状況に陥ったことがある。

“外部”にいる時には欠陥がはっきり見えるのに、ひとたび“内部”の人間になってしまうと、今度は、その信仰体系や理論体系をひたすら護持する側にまわるため、その理論やそれを懸命に守護している自らの姿を客観視することができなくなる。さらには、疑問も湧かなくなるうえに、その権威に忠誠を尽くすため、自らの主体性をも否定するようになってしまう。序章で解説しておいた共同妄想にほかならない。その結果、自分が権威と崇めるものに追従するため、それに沿って積極的に(ただし、もちろん無意識的に)自らの認知を歪め

[註4] 初期の海底ケーブルの敷設で知られる英国の電気工学者、フレミング・ジェンキン Fleeming Jenkin は、ダーウィンの『種の起原』に対する長文の批判的書評を、1867年に『ノース・ブリティッシュ・レビュー North British Review』(6月号)に匿名で載せた(Anonymous, 1867)。自然選択に基づく進化説を強く批判するこの書評を読んだダーウィンは、1869年刊行の第5版でその批判に応じており、第6版以降もそれが踏襲されている(Darwin, 1869, pp. 104-5; 1872 & 1876, pp. 71-72)。

[註5] 統計的観点から見たネオ・ダーウィニズムに関するシンポジウムは、これまで少なくとも2回行なわれている。ひとつは、かつて生物学者の畑井新喜司や精神科医の杉田直樹らが在籍していたフィラデルフィアのウィスタ研究所で1966年4月に開催されたものであり、もうひとつは、カリフォルニア大学統計研究所で1971年4月に開催されたもので、いずれも論文集(Moorhead & Kaplan, 1967; Le Cam, Neyman & Scott, 1971)が出ている。前者は、今西も評価しているフランシス・ヒッチング著『キリンの首』(1983年、平凡社)にも簡単に紹介されている(ヒッチング、1983年、98-99 ページ)。

てしまう（笠原，2011年，125-133ページ）。まさに妄想なので，通常の説得を通じて納得することはほとんどない。それを外部の人間が見ると，カルトを奉ずる信者のように映る。最初は少数から出発しても，信者の数が増し，“国教”的な様相を呈するようになると，磐石の定説として，絶対的権威をもつことになる。圧倒的多数の者は，自らが絶対的権威と認める対象の前では，自らの判断や思考を，自覚することのないまま停止してしまうのである。

今西は，ダーウィンの進化論が動揺した経過や理由について，1980年に出版した『主体性の進化論』^[註6]の中で再説している（今西，1980年，56-63ページ）が，本節での解説は必要最小限にとどめることにする。この解説が必要なのは，後年の今西理論の根幹にかかわってくるからである。

ダーウィンの自然選択説の重大な危機は，早くも『種の起原』第4版を出版した翌年の1867年に訪れた。それまでも，その時々批判に改訂版の中で答えていたが，先のフレミング・ジェンキンの徹底した批判（Anonymous, 1867）はそれまでのものの比ではなかった。ジェンキンは，その環境に適した変異が個体に生じたとしても，混合遺伝のためにそれが雲散霧消してしまい，その結果として，たとえば，「受賞歴のある両親から生まれた仔馬には，優秀な個体よりも劣った個体のほうが多い」（*ibid.*, p. 281）などとして，具体的な反論を行なったのである。

この批判は，遺伝について同じ考えをもっていたダーウィンを直撃する形になった。この批判にダーウィンが応えた部分^[註8]を，参考までに明治期の邦訳から引用すると，その「適切にして価値ある一論文を讀みたるまでは，余は著しき特徴を有すと然らざるとに係はらず，單一なる變化の永遠に保存せらるゝ事の

[註6] その経緯については，アメリカの進化生物学者，ピーター・ボウラーが詳述している（ボウラー，1987年，第9章「ダーウィニズムの失墜」）。

[註7] 『種の起原』は，ウォーレスの登場に刺激されて，それまで執筆していた“ビッグ・ブック”の簡略版として1859年に初版が急遽出版されたが，その後は，主としてさまざまな批判に應えるために，第2版が1860年，第3版が1861年，第4版が1866年，第5版が1869年，第6版が1872年にそれぞれ出版されている。主たる加筆訂正については，各版の冒頭に一覧表として掲載されている。1876年に最後の第6版改訂版が出版されたが，これにはその一覧表がない。これを第6版と対照させると，実際には，climaxをacmeに（pp. 230, 387），greatestをclimaxに（p. 232）変更したり，speaking metaphoricallyという句をつけ加える（p. 377）など，本文の5か所ほどがわずかに変更された程度のものである。

如何に稀有なるかを知悉するに至らざりき」(ダーウィン, 1905年, 146ページ)として、自説にとってきわめて不利となるその指摘が的確であることを、実に率直に認めている。ジェンキンの理論は、まもなくその不備らしきものを指摘された (Bulmer, 2004) ため、ダーウィンの生前にほとんど忘れ去られたようであるが、自然選択説に対する批判は、その後も相次いで現われるのである。

その結果、ダーウィンの進化論は、獲得形質の遺伝や用不用説をとり入れるなど、理論的には次第に折衷的なものになっていった。ダーウィニズムの信奉者からすれば、『種の起原』の初版が理論的にも筋が通っていて好ましいのかもしれないが、ダーウィンは、そのことを率直に記しているように、苦悩しながら、「最後には自分のドクトリンの崩壊することかえりみないで」(今西, 1977年a, 67ページ), 事実のほうを尊重, 優先しようとしたのである。それは、ダーウィンが、科学者としてあるべき姿勢をもち合わせていたためなのであろう。そこにこそ、ダーウィンの著書が今なお往年の輝きを失わない理由がある。今西は、その点をくり返し高く評価している。

次に登場したのは、前章でもふれておいたが、獲得形質の遺伝を否定したアウグスト・ヴァイスマンであった。ダーウィンの没後3年目の1885年に、身体各部分と生殖細胞の間につながりは認められないという、生殖質独立説に基づく反論を行なったのである (Weismann, 1893, p. xiii)。ヴァイスマンが指摘したように、個体の変異を起こしても、それが生殖細胞に届かないとすれば、確

[註8] 今西は、その書評を、アメリカの人類学者、ローレン・アイズリーの著書 *Darwin's Century* (Anchor, 1961) による紹介で読み、その点で自説の一部と共通するジェンキンの見解を知ったという (今西, 1977年a, 158ページ)。しかし、今西が精読した原著は、どこにもそれと明記されていないが、内容からして1876年に刊行された第6版改訂版 (のりプリント) なので、ジェンキンの指摘については、その45ページに、上の本文に引用したような形で既に言及されている。したがって、今西は、このふたつを結びつけて考えることはなかったことになる。ダーウィンは、1869年に刊行された第5版から、この指摘に答えていた (Darwin, 1869, pp. 104-5)。

ついでながらふれておくと、『種の起原』の邦訳は、1896年に経済雑誌社から、学習院大学の教育学者、立花銚三郎の訳で出版されたもの (『生物始源——一名種源論』) が最初である。これは、どこにもそれと書かれていないが、内容から判断して、1872年刊行の原著第6版の邦訳のようである。そのため、ジェンキンの批判にふれた同じ内容の文章がある (139ページ)。それに続いて、1905年に、上の本文で引用した邦訳が東京開成館から同館訳で、1924年には太陽堂から松平道夫訳で出版されているが、これらも同じ版をテキストにしているようである。

かに子孫に伝わることはありえない。^{〔註9〕} そうなると、獲得形質の遺伝は起こりえないことになるばかりか、個体変異をもとにした自然選択による適者生存という仕組みも成立しなくなり、自然選択概念を基盤にしたダーウィンの進化論は、根底から瓦解してしまうわけである。

次に現われたのは、デンマークの植物学者、ウィルヘルム・ヨハンゼンであった。植物の栽培実験をくり返した結果、ダーウィンが考えたような個体差をもとにしたのでは、人為選択によって変化するとしても限度があることを明らかにしたのである (Johannsen, 1911)。これは、ジェンキンの指摘の実験版とも言える。それならば、自然選択によって新種が誕生することなど、なおさらありえないことになる (ただし、この主張は後に否定される)。以上のような批判を次々に浴びた結果、自然選択概念を基盤としたダーウィンの進化論は、次第に信頼を失い、窮地に陥ったのである (今西, 1975年, 43ページ)。

ダーウィンの進化論がその窮境を脱することができたのは、突然変異という現象が発見されたおかげであった。突然変異という現象を今西から見れば、「種の規格をやぶり、それを乗り越えたところの変異」ということになる。突然変異を起こした個体が、その環境条件のもとで最適者として生き残るということが実際に起これば、ダーウィンが着目していた通常の個体変異を突然変異に置き換えるだけで、種の起原を選択に帰せしめる理論が生き返る。この突然変異と自然選択の組み合わせは、ネオ・ダーウィニズム (ジュリアン・ハクスレーの言葉では総合説) と呼ばれるようになる (同書, 43ページ)。^{〔註10〕} その結果、

すくなくとも私が大学に在学していたころ (一九二五—一九二八年) には、すでに突然変異と自然淘汰を二本の柱にした、いわゆる総合説 (synthetic theory) が、正統派進化論の地位を占めて、たれもこれにたいして疑いをさしはさむようにはみえなかったから、これは、おそらく、ド・フリースの今世紀初頭にだした突然変異説が、アメリカに渡って——彼自身も招聘されて、アメリカへ講演に行っている——そこで、アメリカの生物学者たちを刺激し、とくにダーウィン説にたいして、まえからあきたらなくおもっていた〔トマス・〕モーガン (T.H. Morgan) 一派を駆って、ショウジョウ

〔註9〕 これに対しては、前章で紹介しておいた今西やベルクソンの他にも反対意見がある (たとえば, Winther, 2001 参照)。